

他人との接し方から見た日本文化（異文化言い分 EVEN)

著者	張 宏武
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	181
ページ	50-50
発行年	2010-10
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004408



他人との接し方から見た日本文化
張 宏武

私は、日本に来る前に、日本について、あまり深く知らなかったが、ただ一つ不思議な思いがあった。それは、なぜ日本は鉱物資源が乏しいといわれる国なのに、高度成長の奇跡を遂げ、世界屈指の先進国を築き上げたのかということである。実際に日本で生活し、日本人の人々と触れ合う機会が多くなるにつれ、私は、日本人の礼儀正しさに心を打たれ、次第に日本人の他人との接し方に気づき、ついには今の日本を作り上げたのは、日本人特有の態度と大きく関連しているのではないかと、思うようになった。つまり、国づくりの要素は、資源などの物的な外部もの以外に、人間自身の中にもある。もつと言えば、国の文化に大きく依存していると思う。

れる。私は、外国人登録や証明書発行などで時々日本の役所に行ったことがある。行く度に、役所の方々の訪問者に対する態度に凄く感心している。また、私は、消費者としてスーパーや、飲食店に行くこともよくあることであるが、そこでもてなす姿勢に凄く感心させられる。

国の文化は個々の国民の態度や行動から表れる。個々の国民の他人との接し方はその国の文化の現れであって、自文化と異文化に対する考えの現れである。国の文化がその上に成り立っていると思う。国も個人と同様、自文化の良いところを傳承し、異文化の良いところを取り入れることが大切である。自文化がいかに素晴らしくても、持っている人が大事にしないと消えていくことになるし、また、異文化の良いところを取り入れなければ自文化の発展はできないと思う。

日本人の自文化に対する態度から見ると、それを自分たちの財産として大切にしていると思う。例えば、各地に伝わる伝統的な行事も文化の一部であって、このような様々な行事を通じて、人々の求心力を高め、団結力を高める重要な役割を果たしていると思う。私は、日本で多くの行事に参加させてもらったが、その中で、日本人の熱意から自文化に対する誇りや愛着心を強く感じている。

私の印象としては、日本という国は、伝統的なものを大切にし、継承していく一方で、外部の良いものを積極的に吸収している国である。つまり、古くから伝わってきたものと新しく生まれたものとを上手く融合している国とも言える。特に、近代以来、日本は海外の新しい制度や技術を積極的に導入して、自国の実情に合わせた制度と技術を創出し、戦後の高度成長の奇跡を作り出したのである。これはまさに文化の力、いわゆるソフトパワーによるものである。

また、日本人の異文化に対する積極的な態度も強く感じられる。日本は有史以来、積極的に外国の文化を取り入れ、これを自国の文化と融合して、独自の文化を容れさせてきた。日本の町を歩いて、周りの看板を見ると、漢字、平仮名、片仮名、ローマ字など数種類の文字を用途に応じて使い分けているのが印象深い。また、日本の国中、お寺もあれば鳥居もある、キリスト教の教会もあればイスラム教のモスクもある。日本の家庭では、和食を食べれば中華料理や洋食も食べる。それだけを例に取り上げてみても、日本の異文化に対する積極的な態度が窺える。

一方、中国人の他人との接し方については、今の国際化の流れの中で、しばしば耳にする中国人のマナーの欠如を象徴するように、現実問題となっている。

近代の中国においては、日本の「明治維新」のように「変法」と呼ばれる動きも違ったが、多くの人々は、「天朝大国」の觀念が根強く、異文化に対する抵抗が大きかったため、成功しなかった。もつと不幸なことに、一九六〇年代半ばから一九七〇年代半ばの間、日本では高度成長している時、中国では史上例のない「文化大革命」が起こされ、自国の文化が甚だしく破壊された。改革・開放以来、中国では、色々な伝統的な文化も復活していると同時に、異文化に目が向くようになったが、今になっても、「文化大革命」の悪影響を払拭できていない。ある調査によると、自国に古くから伝わる礼儀作法について、日常的に気を付けている中国人はわずか一六%に過ぎない。また、昔の繁栄に陶醉する一方、「西洋崇拜」の面もあると

「他人との接し方」の根底には、自分自身への見方と他人への見方の二つのことに依存する。人間には、必ず長所もあれば短所もある。人と触れ合う際に、自分と他人の長所、短所を客観的に見極め、自分の長所を發揮し、他人の長所を謙虚に学ぶことが大切である。

日本人の他人との接し方はあらゆる場で感じら

る。私は、外国人登録や証明書発行などで時々日本の役所に行ったことがある。行く度に、役所の方々の訪問者に対する態度に凄く感心している。また、私は、消費者としてスーパーや、飲食店に行くこともよくあることであるが、そこでもてなす姿勢に凄く感心させられる。

国の文化は個々の国民の態度や行動から表れる。個々の国民の他人との接し方はその国の文化の現れであって、自文化と異文化に対する考えの現れである。国の文化がその上に成り立っていると思う。国も個人と同様、自文化の良いところを傳承し、異文化の良いところを取り入れることが大切である。自文化がいかに素晴らしくても、持っている人が大事にしないと消えていくことになるし、また、異文化の良いところを取り入れなければ自文化の発展はできないと思う。

日本人の自文化に対する態度から見ると、それを自分たちの財産として大切にしていると思う。例えば、各地に伝わる伝統的な行事も文化の一部であって、このような様々な行事を通じて、人々の求心力を高め、団結力を高める重要な役割を果たしていると思う。私は、日本で多くの行事に参加させてもらったが、その中で、日本人の熱意から自文化に対する誇りや愛着心を強く感じている。

また、日本人の異文化に対する積極的な態度も強く感じられる。日本は有史以来、積極的に外国の文化を取り入れ、これを自国の文化と融合して、独自の文化を容れさせてきた。日本の町を歩いて、周りの看板を見ると、漢字、平仮名、片仮名、ローマ字など数種類の文字を用途に応じて使い分けているのが印象深い。また、日本の国中、お寺もあれば鳥居もある、キリスト教の教会もあればイスラム教のモスクもある。日本の家庭では、和食を食べれば中華料理や洋食も食べる。それだけを例に取り上げてみても、日本の異文化に対する積極的な態度が窺える。

一方、中国人の他人との接し方については、今の国際化の流れの中で、しばしば耳にする中国人のマナーの欠如を象徴するように、現実問題となっている。

近代の中国においては、日本の「明治維新」のように「変法」と呼ばれる動きも違ったが、多くの人々は、「天朝大国」の觀念が根強く、異文化に対する抵抗が大きかったため、成功しなかった。もつと不幸なことに、一九六〇年代半ばから一九七〇年代半ばの間、日本では高度成長している時、中国では史上例のない「文化大革命」が起こされ、自国の文化が甚だしく破壊された。改革・開放以来、中国では、色々な伝統的な文化も復活していると同時に、異文化に目が向くようになったが、今になっても、「文化大革命」の悪影響を払拭できていない。ある調査によると、自国に古くから伝わる礼儀作法について、日常的に気を付けている中国人はわずか一六%に過ぎない。また、昔の繁栄に陶醉する一方、「西洋崇拜」の面もあると


Zhang Hongwu / 海外客員研究員

出身：中国

天津商業大学教授

研究課題：中国の低炭素経済への転換に関する研究—地域レベルの環境ガバナンスの視点から

滞在期間：2010年7月～12月



いった二重構造となっている人も少なくない。今の中国は、まさに混沌としていて、自国文化の樹立に向けて、模索している時期にいると思う。

今、中国でも経済大国になりつつあるが、それは、文化のようなソフトパワーによるものではなく、資源、エネルギーなどの物的な消耗によるもので、環境の大きな破壊によるものである。真の先進国になるためには、自文化を大事にし、日本文化を含む異文化から学ぶべきものが多いと思う。